

こんもり刈られた灌木に囲まれ、道路脇の小さな児童公園は静まりかえっていた。ただ奥の砂場付近に、男の子が一人きりしゃがみこんでいる。年は七、八歳くらい、白い半袖シャツと黒っぽい半ズボン姿。秋も深まったというのに、なんと寒々しい格好をしているのだらうと思った。しかし、もつと奇妙なのは、今現在もう夜の十一時を回っているということだ。さつき腕時計を見たところなんだから、間違いはない。こんな時間にここで子供をみかけたことなどなかった。

犬を連れられた私が公園の入り口でそつと見てみると、男の子は華奢な背を丸め、うつむいた顔に片方の握りこぶしを当ててすすり泣き始めた。かすかにしゃくりあげる声らしきものが聞こえてくる。どうしたのだらうと思ひ、足を踏み出そうとしたとき、グレイのスーツを着た若いサラリーマンが後ろから、私の隣を軽快な足取りで通りすぎて行った。彼が、何のためらいもなく子供に歩みより、優しく訊ねる。その声がひとけのない空間によく響く。

「どうしたんだい、きみ、ひとり？ お母さんはどこなの？ お家は？」

男の子は泣き止んだ。のろのろと立ちあがった。おや、手にスコップを持っているのかな、と思つたら、いきなり若いサラリーマンのほうへ半身をひねって、それを振りかざした。薄暗い街灯の明かりしかなかったのに、私には子供の顔がはっきり見えた。口を大きく開けて、げらげらと笑っていた。

サラリーマンは、あつと声をあげて飛びすさった。彼は逃げようとしたのだ。それでも一瞬遅く、もう彼の腕は切りつけられていた。子供が持っていたのはスコップなどではなかった、それは鋭いナイフだったのだ。子供は、その手には大きすぎるほどのナイフを、またサラリーマンに向けた。今度は胸に突きたてようとしたが、うまくかわされた。若いサラリーマンは片腕をおさえながら身を翻し、全力で逃げていった。入り口で私とすれ違つたとき見たら、腕をつかんだ指のあいだから鮮血が流れ出していた。

男の子がこちらを見ている。ぼつかりとひらいた目が、出口のない穴のように見えた。怖くなった私が一歩後ずさりしたとき、どういうわけか、彼はふいとかき消えてしまった。連れていた犬が、そのときになって狂つたように吠え始めた。

翌日の同じ時刻、私はまた犬を連れて公園に出かけた。入り口まで来ると、やっぱりあの男の子の姿が見える。同じシャツ、同じズボン、そして今夜はブランコに座っている。うつむいたまま、少しだけ足をぶらぶらさせて。

派手な原色のスーツに身を包んだ中年女性が、入り口にたたずむ私の隣を、こつこつヒールを鳴らして通りすぎて行った。タバコと混ざつた甘つたるい香水の匂いが私の鼻先をかすめた。彼女がブランコの子供に歩みより、身をかがめてハスキーな声で訊く、

「どうしたの、坊や、ひとりなの？ お父さんとお母さんは？」

男の子は、ぶらぶらさせていた足をおろし、まっすぐに立って彼女を見つめた。その手には腕の長さと同じくらいの細い小枝が握られている。葉はついていない。先は尖つている。とつぜん、彼はそれを鞭のようにしなわせて、女性の顔めがけて振り下ろした。ぎゃつと鋭い声が上がリ、女性は後ろによろけた。立つて逃げようとした。が、一瞬遅く、彼女の横顔に二度目の鞭が振り下ろされてきた。また悲鳴をあげ、彼女がこちらに走つてきた。見れば、こめかみから頬にかけて細い血の筋が出来ている。彼女はそれを片手で押さ

え、高いヒールに足をもつれさせながら走っていった。
男の子がつまらなさそうにこちらを見ている。その姿がかげろつのように薄れていくと、犬がまた激しく吠え始めた。

その次の日、やはり同じ時刻に、私はまた犬とともに公園の入り口に立った。男の子は手入れの悪い花壇に踏み込み、しゃがんで草花をむしっていた。

白いワンピースを着た女性が通りかかり、私の隣を歩き過ぎようとする。私は彼女を呼び止めた、もし、あなた。彼女がふいと振り向いた。不思議なことに、顔を見ても、いくつくらいだかわからない。少女のようにも思えたが、その口元に浮かんでいる笑みに若さはない。私は言った、やめたほうがいいですよ、あそこに行くのは。彼女が静かに言った、でも、ほうっておくことはできませんから。そして、ゆっくりとした足取りで、男の子のそばへと近づいていった。

「行きましよう、それとも、ずっとここにいたいのか？」

男の子は立ちあがると、むしっていた草花をつかんで女性に投げつけた。彼女が顔や胸からそれを払いのけているあいだに、子供の手には草刈鎌が握られていた。子供は唇だけで薄く笑いながら、脅すようにそれを振りかざした。街灯の明かりに鎌の先が鈍く光る。女性は、逃げようとしなかった。身じろぎもしないで、そこに立っていた。一瞬のうちに子供が腕を振り下ろし、草刈鎌が、まっすぐ女性の胸に突き刺さった。白いワンピースにたちまち血が染みだしてくる。最初はぼつりと赤い点、それが見る間に大きくなった。

女性は胸に手をやると、鎌の先を引き抜いた。血が、どつとあふれた。青白い顔で彼女は微笑んだ。無造作に鎌を捨て、その場に呆然と立ち尽くしている子供に、黙って両手をさしのべた。うそだ、と子供は悲痛な叫び声をあげた。こんなこと、あるわけない。うそだ、うそだ、何度も叫びながら、子供はしだいに崩壊していく。ひび割れ、ばらばらと崩れ落ち、さいごに小さなかけらが山となった。女性はそのかけらを丁寧な拾い集めた。大事そうにぜんぶ拾うと、両腕で胸に抱き、こちらに歩いてきた。

私は目を見開いて彼女を見つめていた。胸の血はもう乾いている。彼女は、さもいとおしそうに、かつて子供であったものの残骸を抱きながら、私に軽く会釈した。すれ違ふとき私は、彼女のしなやかな指のあいだに透き通った水掻きがあるのを見た。

公園を出た彼女の後ろ姿は、遠ざかるにつれ、なぜか次第に大きくなる。街灯を越え、木々を越え、建物を越え、やがて夜の暗い雲間に、その頭は隠れてしまう。

片手を軽く引っぱられる感覚で、私は持っていた引き綱を意識した。が、犬に目をやれども、そこに犬はいない。引き綱の先には赤い首輪があり、それはすぐその地面に後ろ向きにしゃがみこんだ子供の細い首に巻かれている。子供がすつと立ちあがると、首輪はぼろりと外れてしまった。私は思わず後ずさった。にわかには動悸が早くなり、手足が小刻みに震え始めた。子供がゆっくり半身を回し、こちらを振り向く。その手には、何か光るものが握りしめられていた。唾を飲みこみ、混乱した頭で私は思う、どうすればいいのだ。早く逃げなければ。今ならまだ間に合う。

私はまた一步よろけて後ずさった。子供が私をじつと見つめる、泣き笑いしているような表情で。それから、その手に握っているものを、きらきらと振りかざした。

了